

青海波

神代より光り輝く日の本や

干珠満珠の世がたりを

今に伝へて陸奥の

千賀の塩がま煙りたつ

霞に明けし松島の

眺めはつきぬ春の日の

潮の干潟をゆく袖に

うつす薫りも懐しき

梅の花貝桜貝

みるめの磯のあかぬなる

花の跡踏む夏山の

筑波が覗く

船の中

逢瀬の浦のさゝめごと

いつか浮名も立浪の

うちこんでいる真心に

待つとは恋の謎々も

解けた素顔の

夏の富士

清見の沖や

三保が崎

まつに本意なき青東風に

憎やあし辺の片男波

その通路は星合の

なかかけ渡す

かさゝぎの

天の橋立きれ戸とは

裏表なる播磨瀉

汐汲む海女のしるしとて

みどりの秋を残したる

恋は昔のうたひもの

アラめで鯛は

神の代に

赤目と召されそめしより

蛭子の神の釣り上げし

二世のかための懸鯛に

縁しを繋ぐ諸白髪

若やく尉と

うば玉の

闇の景色は

漁火の

ちらりちらら月の出汐に

網引の声の

節も拍子も

一様に

ヤンラ

月の名所は

よそほかに

鳴いて明石の浜千鳥

ヤサホウヤサホウ

主に淡路は気にかゝる

室の泊りを

ソレ松帆の浦よ

ヤサホウエンヤ

面白や

波も静かに

青きが原を

なかにひかえて住吉と

名も高砂の夫婦松

雪にもめげぬ深みどり

栄ゆく家の寿を

なほ幾千代も延ぶるなる

直ぐな心の清元と

めでたく祝ふ泰平の

君が余沢ぞありがたき。